

スポーツがくれた可能性

岩手県北上市立北上中学校

三年 松原 ななえ

スポーツは、私の秘めた「ちから」を引き出してくれた。

一度深呼吸して気持ちを落ち着ける。ペアと目配せをして、心で会話をする。全神経を研ぎ澄まし、集中する。周りの音は何も聞こえない。私は息を殺して相手のサーブを待つ。ラリーが始まった。懸命に足を動かして返球。すかさず相手が強烈なスマッシュを打ち込んできた。シャトルはコート左側にそれた。…が、判定はイン。ゲームセットだ。最後の県中総体はそこで幕を閉じた。

中学校三年間打ち込んだバドミントン。私の心の中に、応援してくれた人への感謝の気持ちと、これで引退なのかという喪失感が込み上げてきた。バドミントンをやめたくない。バドミントンが、私を創りあげてきたものだったからだ。

小さい頃の私は、背が小さく、マイペースで食べることが大好き。小学校一年生の時は腹筋が一回もできず、マラソン大会の順位は下から数えた方が早い。運動とは無縁の人生を送ってきた。それが今、なぜ、こんなにも「スポーツを楽しむ私」になれたのだろうか。

最初のきっかけは、小学校二年生の春に水泳を習

い始めたことだ。続けているうちに新しい友達ができ、速く泳げるようになった。もつと速く泳げるようになりたい、とも思うようになった。自然と、運動とは無縁だったあの時に感じていた「辛い」「つまらない」という気持ちが薄れ、運動することが「楽しい」と思えるようになっていたのだ。

水泳によってスポーツの楽しさを知った私に、さらなる転機が訪れた。以前から興味があったバドミントンの地域のスポーツ少年団に入団したことだ。小学校六年生の六月頃のことである。初めのうちは、ダッシュなどのきついトレーニングをこなした後、シャトルに触れることなくひたすら素振り。こんな練習では楽しさの一つも見い出せない。そう思ったことが何度あっただろう。しかしある日、コーチから「もうシャトルを打っていいぞ」と許可が下りた。今でもその瞬間は鮮明に覚えている。今までの努力が認められた気がしたからだ。

日々のきつい練習を乗り越えて、試合でも少しずつ勝てるようになった。そしてそのことは私の大きな自信となった。

中学生になると、うまくなりたいという一心で、自分からコーチに試合の相手をお願いしに行くようになった。すると、技術面の向上とともに、私の内面の力、つまり精神面も成長していたことに気づいた。「自分から進んで」「積極的に」行動できる、新たな自分と出会うことができたのだ。

中学校二年生の夏休み、部活動では代替わりをして新体制のチームとなる時期だ。私は部長に立候補した。そう簡単に務まる仕事でないことはわかっている。しかし、これまで先輩の姿を見て、追いつけてきた中で部長をやりたいという思いが芽生え、それは日増しに大きくなっていった。そして、これまでに消極的でリーダーに立候補したことがない自分

を、バドミントンを通して積極性が身につき、成長した自分に変えたいという思いも決意を後押しし、部長に立候補できたのだ。

私は部長になった。はじめは、「大変だな、人前で話すなんて恥ずかしい」と、自己中心的な考えに陥っていたが、少しずつ周囲のことを考えて行動することができるようになった。

ある日、母がふとこんなことを言った。

「あなたがバドミントンを始めたときに、周りの親から、『よく六年生から始めたね(他の子たちはもつと小さい時から始めているのに)』と言われたけど、努力してここまでうまくなったし、格上だった人とも対等に試合できるようになったんだから良かったと思うよ。」

嬉しかった。思えば、あの時の小さなきっかけと少しの勇気で今の私があるのだ。

スポーツが私にくれたもの、それは「積極性」と「自分に勝つ心の強さ」、そして「可能性」である。スポーツが私に教えてくれたことは、これから先、挫折してしまいうような時に私を支えてくれる。今、そしてこれからがその「ちから」を生かす時だ。私は将来、医療関係の仕事に就きたいと思っている。今の私がたくさんの人に支えてもらって生活しているように、今度は誰かを影で支えることができる人になりたい。二年後に開催される東京オリンピックでは、スポーツをする人たちを「支える」側のボランティアの仕事もしてみたいと思う。スポーツが世界中の人々に感動を与え、無限の可能性を引き出してくれると信じて。